

今回、京都大学 工学部 地球工学科の2名の学生がスタディツアーに参加しました。



左側の女性が窪田さん、右側の女性が村尾さん
出発前の成田国際空港にて



白い帽子の女性が窪田さん
黒い帽子の女性が村尾さん
村で、とうもろこしをいただいています。

帰国後お二人から下記のような感想をいただきました。

まずは窪田さんの感想です。

ほんの少し

京都大学 工学部 地球工学科 窪田 まど華

ほんの少し、価値観が変わった。毎日体験するとんでもないことの連続で、ドキドキが止まらなかった(>_<)!

PNG(パプアニューギニア)に来ることになったキッカケは、大学での授業の木村先生でした。道直し活動をパネルで紹介するという内容。お金じゃなく知恵を与える、という考えに感心したから。また単純に世界最後の秘境を訪れてみたいという気持ちもあった。

PNG訪問は資本主義・日本でぬくぬくと箱入り娘として育ってきた私にとって大冒険だった。実際に来て見て教科書で読んだ発展途上国のイメージ通り。衛生面は最低、道はボコボコ、ルーズな人々、低い教育水準。でも人々はいつも笑顔でフレンドリー。日本人の私にとっては羨ましい地域の強い結びつきや見渡す限りの大自然。日本人の価値観からすると直した方が良い部分や不便なところは沢山あるし、GDPも低いけど、ニコニコ楽しそうなPNG人や大自然を見ると先進国があればこれだとやってあげなくても、このままで良いじゃないかと思った。先進国が自分達の価値観でかわいそうに思って援助といって手を加えることは押し付けがましいのではないか、彼らの文化や伝統を崩してしまうのではないか。教育支援の面でも無闇に教えると先進国みたいなあれがしたい・これが欲しいと欲が出てきてGDPを上げることに一心不乱になり、この広大な自然が将来建造物に覆われたり、区画整理された商業用の牧草地に取って変わっちゃっても良いのだろうか。結局何もしてあげない方がこの国にとってシアワセなんじゃないか。現に飢えてる人もいないし、みんな楽しく暮らしてるんだから、と思った。しかしPNGで過ごすうちにやはり先進国がこの国にやるべきことはあると考えが変わってきた。その理由は2つある。

1つ目。いつも陽気な村人数人に聞いてみた。今の生活に満足していますか？答えはNOだった。沢

山困っていることを話してくれた。彼らは他の国が機械化して自分達よりはるかに便利な暮らしをしていることをある程度は知っている。比較してしまうのは当然。また、道はひどく雨の時は道に川ができ水溜りができ、雨上がりには陥没と轍が残る。大雨の時に半分決壊し数ヶ月放置されている橋もあった。再建するための資材・資金・技術がすぐには手に入らないようだ。PNG人が徒歩で全ての交通を賄うならこのままでも問題無い。でも輸入自動車を使う生活が浸透しつつある。自動車という便利なものを知ってしまった以上昔には戻れない。でも道路整備は自動車文化に追いついていない。PNG独自の生活に急速に先進国の便利品が入り込んできてアンバランスが生じている。言ってしまうと弥生時代の人々が突如自動車や携帯電話を手に入れたという感じ。中途半端に物を与えてしまった以上、上手く使えるように技術面で助言くらいしても良いのではないかと思った。

2つ目。PNGがあまりにも無防備であるということだ。未開の地ということもあって金・銅・天然ガスなどの地下資源がよく採れる。それを外資がこぞって掘りに来ている。ポーリング跡のヘドロや水銀など産業廃棄物や汚染で苦しんでいる地域がある。でもPNG政府にとっては貴重な収入になっている。このまま放置すれば資源を吸い取られるだけ吸い取られて、後に残るのは汚染だけという状況になりかねない。私達が使っているPCや携帯にも金が使われているから第三者ではないし、汚染を引き起こしている企業だけを責めることは出来ないけど、水俣病や足尾銅山事件など公害病の教訓をもつ日本が教えてあげることあるはずだし、PNG人が自分達を守るくらいの力をつけれるために、教育の普及活動も彼らのためになると思う。

じゃあ具体的に何をすればいいかは解からないけれど、何かしてあげたいと思うなら取り敢えずお金を与えるだけじゃあ意味が無い。相手を理解しようと努め、同じ目線に立って一緒に考える、こっちの言い分も押しつつ相手の意見も尊重する。子育てや友達付き合いに似てる。その意味で、草の根活動は良い策だと思う。

春休みが終わってまた大学が始まる。PNGに行って、自分をもっと知らなければいけないこと、考えないといけないことが見えてきた。このモチベーションが続いて欲しい。こんな機会を作ってくださった木村先生、福林さん、現地でお母さんのようにしてくださった三宅さん、歓迎してくださった現地日本人の皆様にも心より感謝いたします。また行きたいと思っていますのでそのときはどうぞよろしくお願い致します。

続いて村尾さんの感想です。

パプアニューギニアでの研修に参加して

京都大学 工学部 地球工学科 村尾 有紀

私が今回パプアニューギニアに行きたいと思ったのは、木村先生の授業で先生方が日本とは言葉も文化も異なる地域で地元の人と一緒に活動されている事を知り、私も実際にそのような場所に行って地元の人と交流したり現地の生活を肌で感じたりしたいと思ったからです。パプアに行ってみると毎日が新しい事の発見で本当に楽しくて、パプアという国、現地の人びと、そして現地で暮らす日本人の方からは、たくさんの事を学びました。そして特に強く感じたことは、「人のあたたかさがどれだけ他の人の心をあたたかくするか」ということです。

今回行ったゴロカという地方で暮らす人びとの村には水道もガスもなく、また村どうしをつなぐ道は舗装もされずガタガタになっています。日本でそのような状況は考えにくく、どんなつらい生活なのかと思ってしまいがちです。しかし実際には、現地の人々はみんな常に笑って楽しく暮らしていました。車が通ると最高の笑顔で手を振ってくれたり、私たちが近くにいる時は自分たちの村や家族のこと、植物の事、普段の生活の事をとても楽しそうに話してくれたり、また「パプアの楽しかった思い出を、日本の友達に話してね。」と言ったりしていました。その話を聞き表情を見ることで、本当にみんなパプアが大好きで誇りを持って暮らしている、ということがよくわかりました。自然が雄大で熱帯植物も美しく野菜や果物もとても美味しかったパプアですが、私が一番心に残っているのは人びとのそのような最高の笑顔です。大人も子どもも、本当にあたたかく話してくれて常に笑顔でいてくれたので、一緒にいるだけで本当に幸せな気持ちになれました。子供たちとは一緒に遊ぶ機会もあったのですが、その時に言葉が通じなくてもみんな楽しんで楽しむことができたのは、みんなが私たちをあたたかく迎えてくれたからだと思います。人のあたたかさを強く感じる事ができて、本当に幸せでした。

また今回は現地で活動されている JICA の方々とも会わせていただきました。JICA の事やパプアの事などをたくさん教えていただきましたが、どの方々の話も本当に惹きつけられるものがあり、聞いていてとても楽しく勉強にもなりました。

パプアは自然も素晴らしくそこに暮らす人びとも本当に素敵な人ばかりで、みんなとても楽しそうに暮らしていました。また今回パプアに行ったことで、また他の発展途上国にも興味をもつようになり、自分の視野が広がったと思います。普段日本ではできないような経験をたくさんさせていただき、普通の観光旅行よりもずっと楽しく過ごさせていただきました。感じる事・感動することの多かった、このような素晴らしい研修をさせていただき、とても感謝しています。福林さん、木村先生、現地でお世話になった三宅さんや JICA の方々、本当にありがとうございました。